



岩 渕 明

一般社団法人東北経済連合会 参与

グローカルな大学づくり

「グローカル」はグローバルとローカルを組み合わせた造語であるが、岩手大学はグローカルな大学づくりを標榜している。本学は、東日本大震災以降、被災県の大学として被災地域の復興に取り組んできた。災害からの復興は、自然災害に限らず人為災害や紛争によりダメージを受けた地域においても重要な課題であり、我々が直面している東日本大震災からの復興という地域の課題は、世界の他の地域の課題との間に共通点がある、と強く認識している。

先日、初めてタイを訪問した。目的は、ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校と本学との学術交流協定の調印である。ここ2年間で、本学はタイの大学と相次いで協定を締結しているが、交流の目的は、農業や水産業、あるいは食糧の生産性向上に工学的手法を取り入れた、所謂、先端的な農工連携研究を進めることで、日本あるいはタイの農業や水産業のAI、ICT化に寄与していくことである。日本においては、農業従事者の高齢化や人口減少等、様々な要素により情勢が変化していく中で、農業をいかに産業として強化していくかが課題であり、タイにおいては、就業人口において農業従事者の占める割合が最も大きく、輸出産業としての農業の振興を目指す一方、農業従事者の所得向上が課題である。詳細なバックグラウンドや目的は異なるが、革新的技術を用いて農業の発展を目指す点は同様である。まさに、岩手なり東北なりの地域が抱えるローカルな課題と、タイにおけるそれに共通点があるということを実感した。

タイ滞在中、行き交う人々の顔立ちを眺めながら、様々な思案している自分に気付いた。タイ人の中には、日本人に見える人もいれば、ベトナムやインドネシア系、インド系に見える人もいる。民族によっても、それぞれに顔立ちは異なるのであろう。ところで、江戸時代初期、朱印船貿易に携わる日本人がアユタヤに日本人村を作り、そこには侍、商人、工人など男女を問わず1,000人を超える日本人が住んでいたそうである。その後、江戸幕府の鎖国により日本人村は消滅したが、日本人は全員帰国したのだろうか。現地にとどまった者がいれば、現在のタイ人に日本人のルーツを持つ子孫がいるのだろうか。また、過去の戦や王朝変遷によって、隣国と陸続きのタイにおいては、その都度様々な国や民族の大規模な流入が起こったはずである。四方を海で囲まれた日本は、歴史的に他国と比べて比較的人々の流入は起こりにくかったが、これはいつまで通用するのだろうか。

タイには多くの外国企業が進出しているし、走っている車の90%以上が日本車であった。ますますグローバル化が進んでいけば、英語がコミュニケーションツールとなり、さらに岩手県にILC誘致が実現すれば、5,000人規模の研究者とその家族が暮らすことになる。様々な国やルーツを持つ人々が共存できる環境をつくるのが、人材育成をミッションとする大学の大きな役割だと考えている。

(岩手大学 学長 いわぶち あきら)